✝

2023年

4月第4･5週の主日礼拝説教要約

・4月23日：マルコ福音書　12：1－12．

『　終結者　』

・4月30日：マルコ福音書　12：18－27．

『　天使の如き者として　』

衣笠病院教会　牧師　宮原晃一郎

≪ 終 結 者 ≫

あなたがたは王の奴隷となる。その日、あなたがたは自ら選んだ王のゆえに泣き叫ぶことになろう。しかし、主はその日、あなたがたに答えてはくださらない。　（サムエル記上８：１７－１８）

モーセと共に、主なる神に導かれ、奴隷の地エジプトからの脱出に成功したのがイスラエルの民でした。ところが、道中の彼らの不信仰はその後も長年、改まることなく引き継がれます。

時が経ち、士師の時代の終わりに彼らを治めたのは、主なる神の言葉を預かる崇高なる預言者のサムエルでした。しかし彼の後継ぎの息子たちが、民の期待に反して悪政を布こうとします。民は失望し、他民族と同様の王政による支配を欲するようになります。サムエルによる説得（上記：サムエル記８・１７－１８）も空しく、愚かにも王による支配を選択した彼らの、その後の困難な運命は、もう不可避なものとなります。

期待されて即位した初代のサウル王があえなく失脚した後に、ダヴィデ、ソロモンと王国は二代にわたり奇跡的な繁栄を遂げますが、その後、国家は南北に分裂し、北王国が、さらには南王国が順次滅亡してゆきます。その間、神は哀れな北王国には、預言者エリヤを、次にエリシャを、そしてアモスを、さらにホセアを派遣しますが、あえなく王国は滅亡します。

ひき続き主なる神は、北王国を反面教師として懲りたはずの南王国に預言者イザヤ（第１）を、さらにミカを、エレミヤを、そしてエゼキエルを派遣したところ、こちらもヨシヤ王の宗教改革も空しく国家は滅亡に至り、一部を残したまま居住者は、支配階級を中心に、ユダの地からバビロニアへと連れ去られてしまいました。

時を経て、ユダの地に残留した預言者エレミヤからの手紙が届きます。

私（主なる神）は、私の僕である預言者達を繰り返し（南のユダ王国にも）遣わしたが、（当時の）彼らは聞こうとしなかった。

しかし、あなたがた、私がエルサレムからバビロンへ送ったすべての捕囚の民よ、主の言葉を聞け。イスラエルの神、万軍の主は…

（エレミヤ書29：19b-20）

「繰り返し遣わされた預言者達」の言葉に耳を貸さず、神に聞き従わなかった結果こそが、国家の滅亡とバビロニア捕囚という悲劇を生み出していたことがこの手紙の中で“歴史上の原因と結果”として明示されます。

マルコ福音書の譬え話の中の“僕”とは、まさに繰り返し遣わされた預言者達を意味します。その内容にも、ユダヤ人の不信仰にまつわる歴史的背景が見て取れます。またしても、ユダヤの指導者たち（農夫たち）は今、ローマ帝国内の居住地（ぶどう畑＝約束の地）である自治州を手放そうとしています。畑の主人に譬えられている主なる神の、その独り子でユダヤの歴史の終結者ともなり得るイエスの警告に従うこともなく。

“約束の地”は他民族に譲渡され、神は未来永劫、その地に見切りをつけようとしています。主人（神）に見放されたうえ、不信仰のままで放置され解決不可能となってしまった、かの地の紛争にはもう終わりはないのでしょうか…。

≪　天使の如き者として　≫

アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、もちろんこれらの神は同一の主なる神です。ただし、その時々に、それぞれ（親子孫）の人物と、神との関係がバトンリレーされたというお話ではなさそうです。彼らがそろって、しかるべき所（天国？）で、今も“天使の如き者として”生きており、主なる神との関係も継続されているというお話のようです。

さて、サドカイ派の人々の質問は、“この世”にて再会する「復活者」にまつわる素朴な疑問でしたが、イエスの答えは彼らにとって、的を射たものとなったのでしょうか。

サドカイ派の主張は、検証不可能なこと（復活）は（創作話？として）排除するというものです。ユダヤ人同士なら、主なる神に対する信仰は同じだと認知されていても、議論はもとより噛み合いません。ただ、イエスを議論に引き込むための例話として用いられたのが、ユダヤの古い仕来たりのレビラート婚（申命記２５：５－）でした。これは、ある家の長男に子供がなく、そのまま召された場合に次男以下の兄弟が、まだもし生きていれば、「遺された兄嫁」と結婚し、子をもうけ、死んだ兄の名を弟の息子に継がせるというものです。平均寿命が３０歳未満の時代の話です。

サドカイ派はこの規定を拡大解釈します。どこかに７人兄弟がいたとして、たまたま上から順に子供をのこさぬまま召されてしまい、その都度、下の弟が同じ一人の女性（未亡人である兄嫁）と結婚し、これが都合７回成立し、誰も子をのこさず、親子関係が発生しないまま他界した場合、この男女合計８人が、揃って復活をするときに、彼らの夫婦関係はどうなっているのかとイエスに問うたのです。

さて、イエスの答えは、意外なものでした。復活者は娶ることも嫁ぐこともせず“天使の如き者”となっている、というのです。因みに、サドカイ派は天使の存在も否定しています。

けれども、復活も天使も、神の存在とは深く関わるもののようです。もしこれを無下に否定する人がいるならば、イエスはその人の信仰には不備があることを教えます。

逆に、ファリサイ派の人々は復活も、天使の存在も認めていたようです。彼らの中にイエスの理解者が複数いたことも確認されています。後に回心したパウロもその一人でした。彼らが、祭司やサドカイ派の人々の信念よりも、イエスの言葉に親近感を覚えたことは、充分あり得ることでした。

ある時、イエスが高い山（ヘルモン山？）に上られて、そこで預言者エリヤとモーセに出会ったことがあります。その時、これを目撃していた弟子たちに、こんなことを語られました。

人の子（イエス自身）が死者の中から復活するまで、今見たことを誰にも話してはならない（マルコ福音書９：９、他）。

イスラエルの過去の偉人たちが山上に復活していた様子を目撃したイエスの弟子たちが見ていたのは、まさに“天使の如き者”たちの集まりでした。けれども当時の弟子たちにはまだ、その時の様子を、確信をもって説明する知識も能力も備わっていません。

さて、イエスの弟子ではなかった者達が、人間の復活を最初に経験することになるのは、おそらくベタニアのラザロのケースからとなります。復活者としての彼が、如何様に“天使の如き者”であったのかは、今となっては確認できないことです。